

<論文>

## 近代英国翻訳論 — 解題と訳文

ジョン・デナム 二篇

大久保友博

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)

本稿は、17世紀イギリスの詩人ジョン・デナムによる翻訳論の本邦初訳を試みることを主眼とし、その理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成としては、まず詩人当人の伝記的事実に短く触れ、そのうち「当訳の筆者に寄す」および『『トロイ陥落』序文』の二篇について、そのテキストの批判的検討、内容についての解説、そして日本語訳の順に、それぞれ記述する。

### 0. ジョン・デナム小伝

ジョン・デナム(John Denham)は、激動の17世紀イギリスを内戦期から共和制期・王政復古に至るまで、借金にまみれながらもその立場を転々としつつ弁舌・文筆の巧みさで生き抜いた、ジェントリ層出身の人物である。英文学的には、トポグラフィカルな風景詩『クーパーの丘[改訂後]』とその詩形ヒロイック・カプレットを通じて、少なからず知られている。翻訳史の面では、今回取り上げる詩と短文によってしばしば名を見かけようが、詳しくない向きもあると思われるので、まずは簡単に紹介しておきたい。

彼は1615年頃ダブリンで生まれた。父は要職の裁判官だがすでにいぶん高齢で、母も早くに亡くなったため、かなり放任されて育った。よい教育を受けて16歳のときにオックスフォード大学へ進学し、そのあと法学院へも通ったようだが、どちらでもまともに修了した記録が残っていない。つまるところ若年から賭博にはまっており、借金やら金目当ての結婚やらで放蕩の限りを尽くした挙げ句、父親から叱責されて反省文を書き、心を入れ替えたふりをするも、その父が亡くなり遺産を相続するとそれを浪費する始末だった。

彼が世に出る頃のイギリスは主教戦争後の動乱期、宮廷や議会は親国王派と反国王派に分かれ、劇場が閉鎖されるなど世情は不安定であった。1642年、彼がその双方の雰囲気それぞれ察した叙情詩『クーパーの丘[改訂前]』とレーゼドラマの悲劇詩『ペルシアの王』を匿名で出すや大好評を博す。また当時から宮廷周辺の上流階級で社交としての詩をいくつか回覧させていたようで、そのひとつが目に入ったのか、内戦勃発後のその年の秋には国王派として一城の守備を任されることになる。

しかし彼に実際の政治的・軍事的手腕はまったくなく、金策に走った以外ほとんどまともに動かず、議会派にやすやすと包囲されて捕虜となってしまう。1643年の3月には解放されて当時国王軍の本拠があったオックスフォードに戻るが、大失敗した彼は何らの役にも復せず、そこ

で名誉挽回とばかりに様々なプロパガンダを書きとばすに至る。賭博と借金は相変わらずだったが、さらにこの時期、地元の財産が議会派によって没収もされている。

その後、1646年1月のダートマス砦陥落に居合わせて再度捕虜となり、護送中に厳格苛烈で知られる議会派の大物に取り入って捕虜交換の人員に選ばれるも、戦況から流れてしまい、代わりにそのままロンドンで負債のために拘留されてしまう。しかし法的知識と戦時の混乱を逆手にとって何とか解放させるや、すぐさま逃げ去って国外の王党派と合流、分裂する諸派閥におもねりつつ、文筆力を買われて暗号手紙の伝令に従事する。

そして1647年7月には先に述べた議会派の大物への伝手があるとして、幽閉中の国王への接触を王妃から請け負い、(死別した妻の遺産を引き継ぐためとも目されているが)ともかくも帰英して実際に王のもとへたどり着き、それだけでなく寵愛を受けて幽閉中の相談役のひとりにならなれた。だが実務能力のなさはすぐに露呈し、同年11月の国王逃亡計画が失敗する原因となり、王が議会派に追いつめられるに伴って自身も追われて再び大陸へ逃亡してしまう。

国王の処刑後は亡命中の新国王に重用されながら使者として欧州各国へ飛び回っていたが、1653年になると金欠を理由に護国卿体制時のイングランドへ突如帰国、今度は別の議会の大物のもと、その屋敷の客人となって、パリにいた王党派からは(共和政府の詩人)だと大顰蹙を買いながらも、現在よく知られる稿の『クーパーの丘[改訂後]』とウェルギリウス『アエネーイス』の部分訳を出版する。

王政復古に際しては、これまでの活動が功を奏してか、新国王から官職とナイトの称号を得、また成立まもない王立協会の会員へも選出され、世間的には成功者となる。1665年には30歳近く年下の女性と再婚するが、その女性とある貴族との不倫騒動が持ち上がると、同時に彼が狂ったとの噂が立ちはじめ、やがてその妻も不可解な死を遂げたため、毒殺の疑いまで持たれることになった。さらに盗作疑惑まで起こり、晩年は国会議員だったが議場でも疎まれ、世に毒づく詩をものしながら1669年ロンドンにて亡くなった。

## 1. 「当訳の筆者に寄す」

### 1.1 テキストについて

現在発行されている書籍・入手可能な書籍で、この詩についての信頼に足る底本は存在しない。翻訳論のアンソロジーである *English Translation Theory* (T. R. Steiner, 1975) や *Western Translation Theory* (Robinson, 1997)、*Translation - Theory and Practice* (Weissbort and Eysteinnsson, 2006) にしても、その採録元が問題のある *The Poetical Works of John Denham* (Banks, 1928/1969) である以上、同様の問題を無批判に受け継いでいると言っているだろう。そこで研究的な厳密性を期そうとすれば、やはり刊本として発行された当時の書物に当たるしかない。

A 初出 1647年 "To the Author of this TRANSLATION."

in *IL PASTOR FIDO, The faithfull Shepherd. A PASTORALL Written in Italian by*

*BAPTISTA GVARINI, a Knight of ITALIE. And now Newly Translated out of the ORIGINALL.* LONDON, Printed by R. Raworth.

B 再録 1650年 "To Mr. RICHARD FANSHAW Esq; upon his Ingeneous translation of Pastor-Fido into English."

in *COOPERS HILL, A Poeme. The Second Edition with Additions. Written by John Denham Esq;* LONDON, Printed for HUMPHREY MOSELEY.

A' 改版 1664年 "To the AUTHOR Of this Translation."

in *IL PASTOR FIDO: THE Faithful Shepherd. With an Addition of divers other POEMS, Concluding with a short Discourse of the long CIVIL WARRES of ROME. By the Right Honourable Sir Richard Fanshawe Knight.* London, Printed for A. Moseley, and are to be sold at Princes Arms in St. Pauls Church-yard.

C 改訂 1668年 "To Sir Richard Fanshaw upon his Translation of Pastor Fido."

in *POEMS AND TRANSLATIONS, WITH THE SOPHY. Written by the Honourable Sir JOHN DENHAM Knight of the Bath.* LONDON, Printed for H. Herringman at the Sign of the Blew-Anchor in the Lower-Walk of the New-Exchange.

A'' 再版 1692年 "To the AUTHOR Of this Translation."

in *IL PASTOR FIDO: THE Faithful Shepherd. With an Addition of divers other POEMS: Concluding with a short DISCOURSE OF The Long Civil Wars of ROME. The Second Edition. By the Right Honourable, Sir Rich. Fanshaw, Knight.* London, Printed for Richard Bently, Jacob Tonson, Francis Saunders, and Tho. Bennet.

Banks (1928/1969)の問題点は、まず何より本文内容と年号の不一致だろう。各本にはそれぞれ細かな異同があり、初出は他人の発行した翻訳書に献詩として併録されたもので(A)、そののち詩個別での再録を経て(B)、最後に詩行の修正を経て晩年の著作集に同じく単独で収録されたものである(C)。よってAとCのあいだでは内容やタイトルが違っているのだが、バンクスはCのテキストを採用した上で、なぜかどの刊本にも当てはまらない1648年という不可解な年号にこの本文が存在したかのような書き方をしており、スタイナーほか諸氏もその誤りを踏襲してしまっている。しかし "To Sir Richard Fanshaw upon his Translation of Pastor Fido" (1648) というテキストは、上記を見てもわかるように(さらに詩を捧げられたファンショーという人物がその年代ではまだ Sir にはなっていないことから)、ありえないのである。そもそも彼自身の異同の検証がかなり怪しいもので、今回はそれを正す意味でも、またこの詩を執筆当時のデナムの翻訳観を反映させたものと考えられるためにも、Aの底本から訳出するものとする。

なお、執筆年代については1668年の著作集序文に記された回想から、1644年もしくは1645年頃だと推定され、献詩というその性格からも、宮廷サークル内ではその時期に発表・回覧されていた、ないしはファンショー個人に届けられていた、と考えていいだろう。宮廷文学を刊本の年号で認識することの危険性については、次の項で触れる。

## 1.2 内容について

長さは 44 行と短く、詩形のヒロイック・カプレットは 2 行を一単位として韻を踏み内容をまとめていくため切れ味がよくなるものであるが、詩そのものの出来としてはさほどよくなく、むしろ稚拙でしばしば文意を失い、全体として表現が過剰に流れすぎているきらいがある。

それもそのはずで、この詩はそもそも作品として作られたものではなく、宮廷サークルのなかでの社交の一環としてものされたものであるからだ。今の出版文化とは違い、17 世紀前半の文芸というものはまだ広く公に問うものではなく、小さな範囲で特定の目的をもって流通するものであった。

具体的には、筆のすさびや座の興、あるいは誰かにおもねるためのお世辞や賞賛、他にも自分の実力を示すためや名を売るための道具であったりしたわけである(そこから官職が得られることもある)。優れていればパトロンに保護してもらえることもあるが、それはごく少数の者だけであり、文芸だけで生きる者というのはまだほとんどいない。

そして出版というものは商売であり卑しきもので、〈本というモノ〉を利用して効率的に有力者に献呈する手段にはなっても、それ自体は恥ずかしいものであったために、自分の名を伏せたり、「周囲の好評に推されて」といった言い訳を必要としたりした。17 世紀が進むにつれ宮廷自体が揺れ、その基盤が崩れていくことでその意識も次第に弱まっていくのだが、そういった文化のもとで生まれた詩だということを理解しなければならない。だからこそ、そこでは〈書籍〉としてよりも、宮廷内での〈状況〉の方が詩を読む手がかりになるのだ。

このデナムの詩を送られたリチャード・ファンショーという人物は、若くしてその外国語能力を買われ、外交官付きの秘書への抜擢を経て宮廷入り、当時は皇太子の戦時対策秘書であった出世頭である。そのあとすぐに国王からスペイン使節へと任命されるのだが、この詩が読まれた 1644 年頃というのはデナムが必死に名誉挽回しようとしていた時期にもあたるため、彼にとってファンショーは〈お近づきになりたい人物〉であったはずだ。しかも翻訳というのは、ファンショーの得意とする語学力を発揮するものと考えられるから、褒めるには絶好の対象であったと言っているし、献詩として褒めちぎるのは社交的にも何より許された行為だ。

この詩の過剰さは、そういう社交における〈お世辞〉の性質が背景にある。事実、この詩で述べられていることとファンショーの実際の翻訳とは、さほど内実が一致していない。原作であるグアリーニの牧歌的悲喜劇『忠実なる羊飼』(*Il Pastor Fido*, 1590)は、上演当時イタリアでたいへんな物議をかもした作品だが、その特色とされた音楽的文章はヒロイック・カプレットの定型に訳されて失われているし、1602 年に出ていたブランク・ヴァースの旧訳よりもやや言葉の選択がゆるやかだが、訳語や行数において原文からさほど逸脱しているわけではない。

結局のところ、宮廷文学的には〈このような賞賛の声があったからこの翻訳を出版することにした〉という建前の役割しかこの詩にはなく、出版された年にデナムが国王に謁見した際にも、この詩を「妄想の垂れ流し」として今後はそんなことより政治に励むようデナムをいさめるのだが、そのエピソードを回想する当人の筆致が何とも誇らしげなのは、普通なら読まれることのない自分の詩が大物のファンショー経由で王に届いたことの名誉を感じたからであろう。

しかしそれでもなおここに〈翻訳観〉を読むとするなら、このお世辞を〈妄想〉でなく〈経験〉に

立脚したものととらえることはできるだろう。デナムは学生時代にウェルギリウス『アエネーイス』の数巻を試みに訳しているが、それを当時までに行われた他訳と並べてみると、ようやく詩の内容と一致するのだ。

1636年にデナムがやったことをもう少し具体的に説明するなら、ウェルギリウス『アエネーイス』の筋やイメージを着想として、ヒロイック・カプレットの長詩を習作した、と言った方が正しい。字句にはまったく拘泥せず、展開通りに進めながらそこから得られる詩想を定型に落とし込む、といった感じである。このやり方は、それまでの『アエネーイス』訳とはずいぶん異なっている。

たとえば、1555年と1583年、1620年になされた韻文訳は、いずれもフォーティーナーという詩形を使っている。ラテン語の原詩は六歩格で書かれているが、言葉を逐語的に追いかけてやると、簡潔なラテン語から英語に写す際にどうしても単語の数が増え、あくまでも行を合わせようやると、英語で一般的な五歩格の詩では音節の数が足りなくなってしまう。そこで七歩格のフォーティーナーを用いるわけだが、原文の外形が伝わりこそすれ、どうしても間延びしてしまう印象が否めない。

では1632年の訳詩のように、五歩格のブランク・ヴァースでこしらえるという案もあろうが、行にこだわると勢い原文の単語を削らなくてはいけなくなってしまい、表現がすべて単純なものに要約されて、文学的描写が台無しになる。1547年にも行にこだわらない逐語訳があったが、それはそれで今度は横ではなく縦に間延びしたものとなる。どちらにも言葉としての美しさや興味といったものはないだろうし、いずれにしても〈主体的に言葉を選んでいない〉から、品もあつたものではないだろう。

そういうやり方で失われるものが多々あるとするなら、いっそのこと一から〈詩として〉作つた方がよい、という考えに至るのは理解できようし、原典をプロットと想念のレベルに戻してから定型詩を組み上げていくのもひとつの道になるだろう。だがそれでも問題なのは、当のデナムが1636年に作つた訳詩がきわめて出来の悪いもので、若者の習作でしかなかった点だ。この詩よりは控えめであるが、想いばかりが先行してぎくしゃくしており、稚拙で意味の取れないところも少なくない。実際、この習作はある夫人の手稿のなかに残っているため、回覧されていたことは間違いないが、当時の話題になった形跡はない。

この詩は、他人への献詩という、ある種の過剰さを許す宮廷文学の形式に自己を仮託することで、いまだ理想通りの詩が作れないデナムの奥底にあつたやりきれない気持ちがほとばしるように発露した、そういうものとして読むのが穏当だろう。

### 1.3 後世の引用・先行研究など

この詩は、その表現の過剰さや簡潔さもあつてか、後世もしばしば文脈を欠いた形で引用され、引用者によって好きずきに解釈されてきた。この詩が現在もそれなりに知られているのは、その人物たちが英文学における大物であつたからとも言える。よく引かれるのは冒頭の2行と、15行目から24行目までの10行だが(しばしば中途省略あり)、後者に触れたもので有名なのは、なんとと言ってもジョン・ドライデンとサミュエル・ジョンソンの二名だろう。

批評家・翻訳家としてイギリス古典主義時代の雄と見なされるドライデンは、その「『オウィディウス書簡集：翻訳』への序文」(1680)にて、デナムのこの詩を逐字訳から〈模倣〉と呼ばれ

る訳出方法への転機ととらえた上で、その言葉ほどは実践が伴っておらず、控えめなものだとしている。一方で同じく批評家としても有名な 18 世紀の大執筆家ジョンソンは、自ら主宰する『アイドラー』誌(1759)にて同詩を、訳詩における行数一致という慣習的な制約を批判し、詩そのものの自由を主張した重要なものと考え、またデナムのいち早い伝記である『英国詩人列伝』(1779)の当該項目でも同様の位置づけでとらえている。ともあれ、このふたつの観点が英文学史・英国翻訳史における基本となっているのは間違いない。

また前者を作品に取り込んだものとして、トマス・フランクリンの『翻訳:あるひとつの詩』(1753)も注目に値する。ギリシア古典学者・翻訳家であり書店主でもある彼は、この詩で当時の翻訳世相を皮肉りつつ自らの翻訳観を吐露している。デナムの詩行は冒頭に組み入れられる形で引用され、当人は揶揄されながらも内容は一応肯定されて、その上で全 225 行にわたって筆者の翻訳家批判が繰り返られるのである。

そして両方に触れたものとしては、英文学における翻訳論を広汎に扱ったアレグザンダー・フレイザー・タイトラーの『翻訳原論』(1791/1797/1813)がもちろん挙げられよう。そこでは彼らしく献詩の対象たるファンショーの翻訳も読んだ上で、その賞賛に値するものではないとし、詩と翻訳の不一致を早くも示唆している。

現代に近づいたところでは、前者を引いてそのエッセイの題名にもしたウラジーミル・ナボコフを忘れてはならない。その「奴隷の道」(1959)という文章では、『エヴゲーニイ・オネーギン』の翻訳苦心譚として一節で植物の固有名詞の翻訳過程について述べているが、その節の末尾に自らの想いを託すかのごとく、この詩行をドライデンからの孫引きで掲げている(残念ながらことに邦訳ではその部分を誤訳してしまっているが)。

この詩に対する個別研究はなく、『トロイ陥落』の読解補助としてその序文とともに使われるのがほとんどである。そして上記の引用も含め多くの場合、この詩と次の 2. で触れる序文の翻訳観が同一視されているが、デナム本人における共和制成立前・後の違いを考慮すると、かなり危険なことだと言えよう。より精密な分析については、拙論(大久保 2011)を参照いただきたい。

#### 1.4 訳文

かくたるや我らが驕り、我らが愚昧、我らが定め、  
 書くことあたわざる者の他に、翻訳するはなし。  
 者どもにとりて機知また声がまさに欠けたる所は、  
 汝のうちにある品あるいは言葉遣いなどなるぞ。  
 なおかつ汝の差配にてよみがえりし今作たるや、  
 技量無しの手になる疵を、振り払うものなるぞ。  
 名声確かにして、汝が正しくも<sup>あた</sup>値を置くは、  
 創り出す誉れよりも、取り戻すことの誉れ。  
 相手の作よりも低き才にて試みるべからず、  
 翻訳を。なぜなれば、植え移されし機知とは、

<sup>かぜつち</sup>風土の悪しき所ことごとく分ち持ち、して  
 凍りゆく脳髓たるや冷えゆく気候のごとなり。  
 労もむなし、そのゆえんは生き活きたる精神を  
 産めるものなきがため、ただ火照る熱のみなり。  
 かの奴隷の道を、汝は気高くも向こうへ退けん、  
 言葉に言葉を、行に行を一つ一つ辿るかの道を。  
 これらみな、卑屈な脳髓の苦の産物なれば、  
 詩歌の成果ならずして、ただ詩歌の痛みなり。  
 品なくこちなき技、その狭きありようがため、  
 想いの飛ぶを許さず、拙く言葉にこだわるのみ。  
 新たなる気高き道なるものを、汝は求む、  
 そも翻訳を、かつ翻訳者をも成さんがために。  
 者ども残すは灰なるも、汝が保つは炎なり、  
 その意に忠実に、しかして誉れにはより忠実に。  
 汝が浅しと見いだすその流れを渡れること、  
 己に許すは、そを高く流々とさせんがためなり。  
 たとい賢明に復し戻さんとしても、いかな美も、  
 時の、言葉の、場所の変化によりて失わるるもの。  
 詩の韻律の性質、その音量に縛られ、ために  
 その調べを不幸なる韻文へと売り渡すことなく、  
 その簡なる力有する真髓なるものすべてを  
 締めなく長きへと伸ばしゆるめることもなし。  
 しかれども(汝のものと我々が見間違わぬよう)  
 果ては汝の魂をも相手の輪のうちへと制される。  
 新しき名、新たなる衣、なおかつ当世の気質、  
 変えられし場や人物らは、世をねめましけれ、  
 そが汝の作品となるなれば。なぜなれば、我らは  
 彼らより引き離すを感謝感激せし者ありと知れり。  
 その念入りの手の、実物さながら書き写せらるるが、  
 かの歌曲を、かの台詞を、して顔の特徴をもなら、  
 その自由かつ大胆たる筆遣いもて、様々な姿態を、  
 あるいは引き立つる装いを描き表すものならん。  
 氏は、あれらを休める人らと同じくせましけれ、  
 おのれの造りが最良たりと知ることなかりせば。

【異同】(綴りの違いについては省略する)

11.3 機知 → 技芸:C

11.5-6 (行全体の改訂:C)

なおかつ汝によりて蘇りしこの偉大なる作品は、  
技量無しの手による疵と無縁にてそびえ立つ。

11.20 こだわるのみ → うちすえるのみ:B(誤植か)

11.39 その念入りの手の → その達人の手の:C

## 2. 『トロイ陥落』序文

### 2.1 テキストについて

この短文の底本についても、「当訳の筆者に寄す」と同様、完全に信頼できるものはない。とはいえ、Banks (1928/1969)の校訂ミス一ヶ所に留意しておけば、さほどの問題はないだろう(第二段落の *sit not naturally and easily on* が *fit...*となっている、意味はほぼ同じ)。この誤りは、第二版の正誤表に記されているものでもあるが、先に挙げた三つのアンソロジーはともに反映させずそのままであるし、バンクス編集の第二版からの再録をうたっている最新のテキスト、*Early Augustan Virgil* (Sowerby, 2010)にしても同じく見落としている。

A 初出 1656年 "THE PREFACE."

in *THE DESTRUCTION OF TROY, AN ESSAY UPON THE SECOND BOOK OF VIRGILS AENEIS. Written in the year, 1636.* LONDON: Printed for Humphrey Moseley, at his shop at the sign of the Princes Arms in S. Pauls Church-yard.

B 再録 1668年 "THE PREFACE."

in *POEMS AND TRANSLATIONS, WITH THE SOPHY. Written by the Honourable Sir JOHN DENHAM Knight of the Bath.* LONDON, Printed for H. Herringman at the Sign of the Blew-Anchor in the Lower-Walk of the New-Exchange.

AとBの異同については、綴り字や単語の大文字の別のみである。訳出に際してはAに拠った。

執筆年代については『トロイ陥落』の推敲と同時期と考えられ、ウィルトシアにあるペンブルク伯邸に滞在中の1653年から1655年のあいだであろう。出版を意識してあらためて書き起こされたものかと思われる。

### 2.2 内容について

当時の本にして5ページ、今なら1枚に収まるかという短い文章だが、初出の書誌にある通り、かつて当人の行った翻訳『アエネーイス』の第二巻部分を改稿して出版された『トロイ陥落』に序文として付されたものである。

この短文は一見、前詩と内容が同じようにも見えるし、これまでそのように扱ってこられることが多かった。その執筆年代の差や心境の変化などが考慮されることもなく一緒にされ、同じことを語っているものとされた。だが詳しく検討してみると必ずしもそうとは言えず、詩と散文という

もののみならず、そもその問題意識から異なっていることがわかる。

前詩では、表現の形として〈高らかな道の話〉になっていた。才能あるものがどの道を選びゆくのかということで、あくまでも宮廷内での状況に即したものである。だがここでは、喪失を目の前にしていった自分かどのように振る舞えばいいのか、という話に変化している。どうしても消えてしまうもの、ある種の必然的な状況をふまえた上で、翻訳者の行動を問うているのだ。

そのような表現になるのは、デナムの置かれた境遇が少なからず関係している。小伝の項でも述べたように、この時期にはすでに前国王のチャールズ一世は処刑されている。イングランドという国は議会による共和制へ移行、それとともに国王を頂点とした宮廷も消滅し、そこに寄りかかっていた社交と出世の手段としての文芸も、その実体を失うことになる。それだけならまだしも、このときのデナムは王党派の残党からも離れて、護国卿体制下のイングランドでそれなりの自由を満喫できるとは言え、よるべない軟禁状態にあった。

ゆえに、翻訳の文体もこれまでの宮廷文芸のあり方では通用しない。受け手のいない文体は成立し得ないのだ。かつての訳でとったような過剰で直接的な表現も時宜にあったものへと変えられ、そして内戦期にデナムが行ったような暗号伝令や使者のごとき〈忠実なる仲介役〉も誤りとして捨てられる。その意味では、デナムの取り組むべきは二重の翻訳だと言えるだろう。ひとつにはラテン語から英語へという移し替えて、もうひとつが失われた宮廷から別の空間への転身である。そのためにも今までのものではない新しい詩想が必要だとされたのだ。

そして当の翻訳では、よしとする表現の基準が既稿とは異なっている。勢いやパワーを重視するところから、適度に抑えて観念やイメージをふくらませるようなものへと。それは作品としての自立へ向かい始めており、来たるべき近代文芸の時代を予期させるものでもある。実際にはこのあと王政復古が起こり、デナムも報償として安定した地位につけてしまうため、これより先へ本人が進むことはないのだが、狭間であって偶然的に今後の文芸を先取りできた時代性がこの翻訳論に残されていると言っていいだろう。

こういった文章を読む際に注意すべきなのは、現代的に読みすぎるといった弊だ。とりわけ単語の意味の変遷や原義・出典を意識しつつ向き合わなければ、筆者の言わんとするイメージや核などをつかみ損ねるおそれがある。ラテン語の〈*interpretes*〉にせよ、最終的な転義である〈訳者〉ととってしまうと、その裏にある原義が失われてしまい、どうしてそのような用法になり、なぜそのように引用されているのかわからなくなってしまう。常に時代と人間と言葉を往還させながら、内容のことを考えていくことが必要だろう。

### 2.3 後世の引用・先行研究など

こちらでよく引用されるのはだいたいのところ「詩想を詩想に」のくだりだが、比べてみた場合、前詩の方は文学的興味を惹くのだが、こちらはどちらかというと批評的な援用として使いたくなるらしい。

筆頭に挙げられるのはやはりドライデンで、前詩を引いた同じ序文で取り上げている。そのあとにはアディソンとスティールの『ガーディアン』誌が1713年に翻訳の話題のなかで「著者の踵を辿る卑屈に近づきすぎの模倣を真っ当に笑うもの」として掲げ、そしてタイラーは前掲書第四章「訳詩に許された自由について」の枕としてこの一節を持ち出している。が、いずれにしても

内容について深く言及しているわけではない。逐一取り上げないが、現代の評論においてもさほど変わりがない。

とはいえ、前詩と合わせてこのデナムの翻訳論は、翻訳論史や翻訳論のアンソロジーでは割合に常連である。古くは Amos (1920) や T. R. Steiner (1975) を挙げてもいいだろうし、最近では Robinson (1997) や Weissbort and Eysteinnsson (2001) がある。

現代の研究では、前詩同様『トロイ陥落』解釈のため副次的に読まれることが多く、大きく扱ったものとしては Venuti (1993a) (のち Venuti (1995) に収録された考察) があるが、その解釈に対する英文学者からの強い異論・反論 (Hopkins, 2005; Davis, 2008) が存在する。また、ドライデンの翻訳論を扱った論文からの比較的な読みもふたつ (O'Sullivan Jr., 1980; Caldwell, 2004) ある。

いずれにしても、Davis (2008) を除いては観念的な言い回しの多いこの文章の本質をつかみかねているように思われる。こちらも詳しくは、拙論 (大久保 2011) の考察を参照されたい。

## 2.4 訳文

称賛に値する翻訳があまりに少ないが、それこそ私も許容できるものを滅多に見たことがない。このような無理をなすのは、大体のところおのれを高めずして他人から盗もうとする惨めな手合いで、自身の誉れを上げることなく、優れた作家の名声を引き下げる。この我が名詩人ほどむごく扱われてきた作家はいない。理由は明らかで、はるか優れたものは模倣の難易度も高いのだ。最低の作家でもいまだ翻訳者にひどい目に遭わされるというのなら、最高の者が大怪我させられぬなど、いかにありえぬことであるか。であるから、自分の模写が原典と等しいと考えるほどの自惚れを私は持ち合わせていないし、(したがって) 私自身も、ここで非難した他人の罪と同じものがまったくないわけではない。だが私がこれまでの他者の仕事よりウェルギリウスへの傷を少なくできたとするなら、ある程度、彼を正当に扱ったと言えるだろう。また実際、彼をより正当に扱いたいというのがこの拙筆唯一の意図であり、それがこの作家の訳し方をここで新しく切り開くことによってなされるのだ。このような役を引き受けるのにより適した、年若く時間があり、まして運もあるような人々のために開くのである。

思うに、詩人を訳す際の卑しき誤りとは、〈忠実な仲介役 *fidus interpres*〉を気取ることである。そういう懸念を、真実や忠実という事柄を扱う人々に持たせようではないか。だが詩において仲介を目指す者が誰であれ、求められぬことを試みるのであるから、その試みるものがなされることはけしてないだろう。なぜなら、翻訳者の仕事というものは言葉を言葉に訳すことだけでなく、詩想を詩想に訳すことでもあるからだ。詩想はとらえがたい精神であるため、ある言語から別の言語へ移し替える際にみな蒸発してしまう。ゆえに新しい精神を翻訳で加えなければ、残るのはただ〈余滓 *caput mortuum*〉のみとなるだろう。というのも、どの言語にも特有の美点や妙味があり、それが言葉へ命や力を与えるからである。であるから、誰であれ、逐辞訳を試みる者には、いわゆる旅する若者の困難がつきものなのだ。すなわち、他国でおのれの言葉を見失い、置き換える言葉を何一つ母国へもたらせぬというあれである。なぜなら、ラテン語の美点も英語に翻せば失われるだろうし、英語の美点もラテン語の言い回しにされることで同じようにな

る。発話というものは我々の思想が外へと表出したものであるので、その発話の外形や様式というものは時代によって様々である。服の流行よりも人々の発話の方がはるかに変化を受けやすいものなのだ。思うにこれは、タキトゥスが〈耳に合ったそのときの表現を *Sermonem temporis istius auribus accommodatum*〉と言って表そうとしたものなのだと思う。つまり変化というものは、目と同様、耳の好奇心をもくすぐるものなのだ。ゆえに、ウェルギリウスが英語を話す必要がなければならぬ場合、彼はこの国の人としてだけでなく、この時代の人としてしゃべることこそふさわしいのである。私が彼に着せたこの装いが(もっとよい言い方があればいいのだが)厳粛な人物にはさりげなくもそれらしくもないとしても、それでも近ごろフランス語やイタリア語で渡されたあの愚者の衣よりは彼をましにするだろう。少なくとも、部分的に実物を過剰に大きく小さくなどして、彼を不恰好に見せてはいないだろうと信じている(それというのも、私は彼に倣うことを第一の関心としている、なぜなら本人がその関心を全身で自然に倣うこととしているからだ)。いかなる場所でも、彼のものでなく私のものに見せてしまうような暴力を、元の想念へ加えてはいない。私の表現が彼のものほど豊かでない場合は、我らが言語ないし私の技量が足りないのである(ただしどちらかという私自身の方が怪しい)。だが私のものが彼のものより豊かな場合は、繰り返し読んだ際に私の記憶へ残った印象が現れたに過ぎない。であるから、それらが本人の着想でないとしても、少なくともそこから生まれたものではある。そしてもし(ほぼ全行で本人がやったよりも下手に語らせたとわかった上でそれでも)折々私が彼にうまく語らせようという過ちを犯したとするなら、それはひそかに正しく誤りと断じられるのだろうと信じているし、またそれが模倣でないとするなら、許容できるほどのものかもしれない。

.....  
**【著者紹介】**

大久保友博(OKUBO Tomohiro) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程在籍中、白鳳女子短期大学非常勤講師。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。〈大久保ゆう〉名義にて主にオーディオブック分野での文芸翻訳に携わる。連絡先: holmes@alz.jp

.....

**【参考文献】**

- Addison, J. et al. (1713/1714). No 164. Friday, September 18, *The Guardian*, London: Tonson, 440-444.
- Amos, F. R. (1920/1973). *Early Theories of Translation*, New York: Octagon Books.
- Banks, T. H. (ed.) (1928/1969). *The Poetical Works of John Denham*, 2nd ed., North Haven: Archon Books.
- Bassnett, S. (2002). *Translation Studies*, 3rd ed., New York: Routledge.
- Bennet, H. S. (1970). *English Books and Readers 1603 to 1640: Being a Study in the History of the Book Trade in the Reign of James I and Charles I*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Berry, H. (1971). Review of Harmony from Discords, *Renaissance Quarterly*, 24(3): 414-419.
- Berry, H. (1974). Sir John Denham at Law, *Modern Philology*, 71(3): 266-276.

- Boucher, W. (2001). The Renaissance, *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 45-55.
- Brooks, H. F. (1949). The 'Imitation' in English Poetry, especially in Formal Satire, before the Age of Pope, *The Review of English Studies*, 25(98): 124-140.
- Caldwell, T. (2004). Dryden and Denham, *Texas Studies in Literature & Language*, 46(1): 49-72.
- Carson, A. E. (2005). The Hunted Stag and the Beheaded King, *Studies in English Literature 1500-1900*, 45(3): 537-556.
- Cicero (1949). De Optimo Genere Oratorum, *Cicero II (Loeb Classical Library)*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 387-373.
- Davidson, P. (2004). Fanshawe, Sir Richard, *Oxford Dictionary of National Biography*, v.19, Oxford: Oxford University Press, 20-23.
- Davis, P. (2008). *Translation and the Poet's Life: the Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*, Oxford: Oxford University Press.
- De Groot, J. (2004). *Royalist Identities*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- De Groot, J. (2008). John Denham and Lucy Hutchinson's Commonplace Book, *Studies in English Literature 1500-1900*, 48(1): 147-163.
- Denham, J. (tr.) (1636/2010). Aeneid: The 1636 Version, *Early Augustan Virgil*, Lewisburg: Bucknell University Press, 23-117.
- Denham, J. (1642a). *Coopers Hill: A Poeme*, s.l.: s.n.
- Denham, J. (1642b). *The Sophy*, London: Walkley.
- Denham, J. (1647). To the Author of this Translation, in R. Fanshawe (tr.) *Il Pastor Fido, The Faithfull Shepherd: a Pastorall*, London: Raworth.
- Denham, J. (1650). To Mr. Richard Fanshaw Esq; upon his Ingenuous Translation of Pastor-Fido into English, *Coopers Hill: A Poeme*, 2nd ed., London: Moseley, 21-22.
- Denham, J. (1651). *The Anatomy of Play*, London: Bourne.
- Denham, J. (1655). *Coopers Hill: Written in the Yeare 1640. Now Printed from a Perfect Copy; and a Corrected Impression*, London: Moseley.
- Denham, J. (tr.) (1656). *The Destruction of Troy, an Essay upon the Second Book of Virgils AENEIS. Written in the Year, 1636*, London: Moseley.
- Denham, J. (1664). To the Author of this Translation, in R. Fanshawe (tr.) *Il Pastor Fido, The Faithful Shepheard*, London: Moseley.
- Denham, J. (1668a). To the King, *Poems and Translations with the Sophy*, London: Herringman.
- Denham, J. (1668b). To Sir Richard Fanshaw upon his Translation of Pastor Fido, *Poems and Translations with the Sophy*, London: Herringman, 119-121.
- Dryden, J. (1680/1980). Preface to *the Translation of Ovid's Epistles*, in I. SATO (ed.) *John Dryden's Theory of Translation*, Tokyo: Hokuseidō Shoten, 3-9.
- Dymock, a kinsman of Edward (tr.) (1602). *Il Pastor Fido: or The Faithfull Shepherd*, London: Waterson.

- Eliot, T. S. (1928). John Denham, *Times Literary Supplement*, 5 July 1928: 501.
- Eliot, T. S. (1930). The Minor Metaphysicals From Cowley to Dryden, *The Listener*, 3(65): 641-2.
- Ellis, R. and L. Oakley-Brown (1998). British Tradition, *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London: Routledge, 333-343.
- Fanshawe, R. (tr.) (1647). *Il Pastor Fido, The Faithfull Shepherd: a Pastorall*, London: Raworth.
- Francklin, T. (1753). *Translation; A Poem*, London: Francklin.
- Guarini, G. B. (1615). *Il Pastor Fido: Tragicomedia Pastorale*, Venezia: Zalcieri.
- Helgerson, R. (1983). *Self-Crowned Laureates: Spencer, Jonson, Milton and the Literary System*, Berkeley: University of California Press.
- Hermans, T. (1999/2004). *Translating in Systems: Descriptive and System-oriented Approaches Explained*. Shanghai: SFLEP.
- Hill, C. (1955). *The English Revolution 1640: An Essay*, London: Lawrence and Wishart.
- Hill, C. (1985). *Writing and Revolution in 17th Century England*, Brighton: Harvester Press.
- Hill, C. (1990). *A Nation of Change and Novelty: Radical Politics, Religion and Literature in Seventeenth Century England*, London: Routledge.
- Hopkins, D. (2005). Dryden and his Contemporaries, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 56-66.
- Horace (1929). *Ars Poetica, Horace (Loeb Classical Library)*., Cambridge, MA: Harvard University Press, 442-489.
- Howard, H. (tr.) (1547/1963). *The Aeneid of Henry Howard, Earl of Surrey*, Berkeley: University of California Press.
- Johnson, S. (1759/1975). The Idler, Nos. 68, 69, *English Translation Theory, 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum, 117-121.
- Johnson, S. (1779/2006). *Lives of the English Poets*, Oxford: Clarendon Press.
- Kelliher, W. H. (1971). Review of Harmony from Discords, *Review of English Studies*, 22(85): 79-81.
- Kelliher, W. H. (1986). John Denham: New Letter and Documents, *British Library Journal*, 12: 1-20.
- Kelliher, W. H. (2004). Denham, Sir John, *Oxford Dictionary of National Biography*, v.15, Oxford: Oxford University Press, 775-778.
- Kelly, L. (2005a). The Eighteenth Century to Tytler, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 67-78.
- Kelly, L. (2005b). Francklin, Thomas, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 522.
- Lewis, C. T. and C. Short (1879/1975). *A Latin Dictionary Founded on Andrew's Edition of Freund's Latin Dictionary Revised*, Enlarged, and in Great part Rewritten, London: Oxford University Press.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: in Eighteenth-Century England*, Princeton:

- Princeton University Press.
- Marcus, L. S. (1994). *Politics and Pastoral: Writing the Court, Culture and Politics in Early Stuart England*, Basingstoke: Macmillan Press.
- May, T. (tr.) (1628). *Virgil's Georgicks*, London: Walkley.
- May, T. (tr.) (1631). *Lucans Pharsalia: or the Ciuill Warres of Rome, betweene Pompey the great, and Iulius Caesar*, London: Iones.
- Mercer, M. J. (2004). Franklin, Thomas, *Oxford Dictionary of National Biography*, v.20, Oxford: Oxford University Press, 753-754.
- Miner, E. (1971). *The Cavalier Mode from Jonson to Cotton*, Princeton: Princeton University Press.
- Mynors, R. A. B. (ed.) (1969). *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford: Oxford University Press.
- Nabokov, V. (1959). The Servile Path, *On Translation*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 97-110. (日本科学技術翻訳協会(訳)(1970)「奴隷の道」『翻訳のすべて』日本科学技術翻訳協会)
- Nida, E. (1970/2004). *Towards a Science of Translating*, Shanghai: SFLEP.
- Norbrook, D. (1994). Lucan, Thomas May, and the Creation of Republican Literary Culture, *Culture and Politics in Early Stuart England*, Basingstoke: Macmillan Press, 45-66.
- Norbrook, D. (1999). *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627-1660*, Cambridge: Cambridge University Press.
- O Hehir, B. (1968). *Harmony from Discords: a Life of Sir John Denham*, Berkeley: University of California Press.
- O Hehir, B. (1969). *Expans'd Hieroglyphicks: A Critical Edition of Sir John Denham's Coopers Hill*, Berkeley: University of California Press.
- O'Sullivan Jr., M. J. (1980). Dryden's Theory of Translation, *Neophilologus*, 64(1): 144-159.
- Parker, R. (1994). *The Oxford Illustrated History of Opera*, Oxford: Oxford University Press.
- Renner, F. (1989). *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*, Amsterdam: Rodopi.
- Phayer, T. (tr.) (1558). *The Seuen First Bookes of the Eneidos of Virgill Conuerted in Englishe Meter*, London: Iugge.
- Robinson, D. (ed.) (1997/2002). *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, 2nd ed., Manchester: St. Jerome Publishing.
- Sandys, G. (tr.) (1628). *Ovid's Metamorphosis*, London: Grismond.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*, London: Routledge.
- Smith, F. S. (1930). *The Classics in Translation: An Annotated Guide to the Best Translations of the Greek and Latin Classics into English*, London: Charles Scribner's Son.
- Sowerby, R. E. (2010). *Early Augustan Virgil*, Lewisburg: Bucknell University Press.
- Stanyhurst, R. (tr.) (1582). *Three First Four Bookes of Virgil: His Aeneis Translated intoo English Heroical Verse*, Leiden: Pates.

- Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, T. R. (1975). *English Translation Theory, 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum.
- Trevor-Roper, H. R. (1953). The Gentry 1540-1640, *Economic history review*, Supplements 1, Cambridge: Cambridge University Press.
- Trevor-Roper, H. R. (1965). The General Crisis of the Seventeenth Century, *Crisis in Europe 1560-1660: Essays from Past and Present*, London: Routledge.
- Tytler, A. F. (1813/1978). *Essay on the Principles of Translation*, Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, L. (1993a). The Destruction of Troy: Translation and Royalist Cultural Politics in the Interregnum, *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 23(2): 197-219.
- Venuti, L. (1993b). Translation as Cultural Politics: Regimes of Domestication in English, *Textual Practice*, 7(2): 208-23.
- Venuti, L. (1995/2008). *The Translator's Invisibility: a History of Translation*, 2nd ed., New York: Routledge.
- Venuti, L. (1998). Strategies of translation, *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London: Routledge, 240-244.
- Venuti, L. (2001). Neoclassicism and Enlightenment, *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 55-64.
- Vicars, J. (tr.) (1632). *The XII Aeneids of Virgil, the Most Renowned Laureat-Prince of Latine-Poets; Translated into English Deca-Syllables*, London: Alsop.
- Weissbort, D. (2001). Poetry, *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 89-96.
- Weissbort, D. and A. Eysteinsson (ed.) (2006). *Translation - Theory and Practice: A Historical Reader*, Oxford University Press.
- Wilcher, R. (2001). *The Writing of Royalism, 1628-1660*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wroth, T. (tr.) (1620). *The Destruction of Troy, or the Acts of Aeneas*, London: Nicholas.
- 大久保友博 (2011) 「ジョン・デナムの翻訳論—〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』第8号: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 佐藤勇夫 (1981) 『坪内逍遙におけるドライデン受容の研究—東洋と西洋における比較文学の原点』北星堂書店